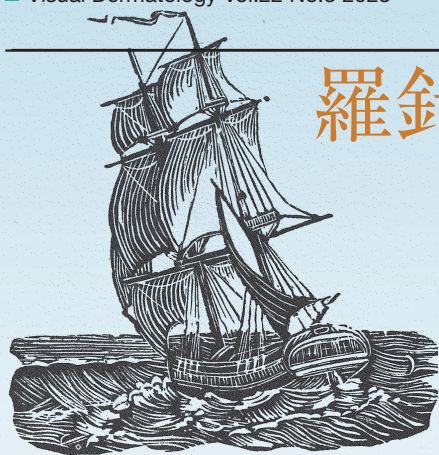


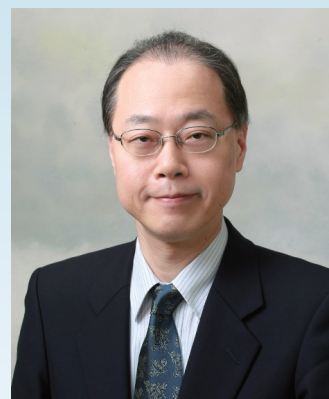


羅針盤

佐伯 秀久

Hidehisa Saeki

日本医科大学皮膚科 教授



JAK 阻害薬の治療上の位置づけ

種々のサイトカインなどのシグナル伝達系であるヤヌスキナーゼ (Janus kinase : JAK) には, JAK1, JAK2, JAK3, tyrosine kinase 2 (TYK2) の4つが含まれる。最近, アトピー性皮膚炎, 乾癬, 円形脱毛症などに JAK 経路を抑える JAK 阻害薬が臨床応用されつつある。JAK 阻害薬は外用薬と内服薬に大別される。

2020年1月に JAK 阻害外用薬であるデルゴシチニブがアトピー性皮膚炎に対して承認されたのを皮切りに, 2020年12月には JAK1/2 阻害内服薬であるバリシチニブがアトピー性皮膚炎に対して適応拡大された。2021年5月には JAK1 阻害内服薬であるウパダシチニブ水和物が関節症性乾癬に対して適応拡大され, 8月にはアトピー性皮膚炎に対して適応拡大された。2021年9月には JAK1 阻害内服薬であるアプロシチニブがアトピー性皮膚炎に対して承認された。2022年6月にはバリシチニブが円形脱毛症に対して適応拡大された。2022年9月には TYK2 阻害内服薬であるデュークラバシチニブが尋常性乾癬, 膿疱性乾癬, 乾癬性紅皮症に対して承認された。最近2~3年における JAK 阻害薬の皮膚科領域における臨床応用は目覚ましく, 治療上も重要な位置を占めつつある。

編集部から「JAK 阻害薬」の編集依頼を引き受けた際, 「JAK 阻害薬を上手に使おう」というタイトルのもと, 第一線でご活躍の先生方に執筆をお願いすることにした。また, 総論では「JAK 阻害薬による治療の現状と展望」について記載した。

Part 1 の「JAK 阻害外用薬による治療の現状」では, デルゴシチニブ軟膏の開発経緯やアトピー性皮膚炎に対する治療についてご執筆いただいた。Part 2 の「JAK 阻害内服薬による治療の現状」では, JAK 阻害内服薬使用時の注意点に関して, 膠原病内科医の亀田秀人先生にご記載いただいた。また, 関節症性乾癬に対するウパダシチニブ水和物の治療, アトピー性皮膚炎に対するバリシチニブ, ウパダシチニブ水和物, アプロシチニブの治療についてご執筆いただいた。さらに, JAK 阻害内服薬使用時の病診連携に関してもご執筆いただいた。Part 3 の「JAK 阻害薬による治療の展望」では, 円形脱毛症と尋常性白斑に対する JAK 阻害内服薬による治療, TYK2 阻害薬の開発状況と今後の展望についてご記載いただいた。また, Dermatological View では, SARS-CoV-2 (新型コロナウイルス感染症) による肺炎に対するバリシチニブによる治療に関して, 呼吸器内科医である藤田和恵先生にご執筆いただいた。執筆をご快諾いただいた先生方に深謝するとともに, 本特集が皮膚科の先生方の日常診療に少しでもお役に立てれば幸いである。

JAK 阻害内服薬は基本的に乾癬における生物学的製剤と同様のスクリーニング, モニタリング検査が必要な薬剤に位置づけられる。とくに高齢者への使用には注意が必要である。TYK2 阻害内服薬の安全性の評価も含めて, 今後, 各薬剤の市販後調査の結果を注視していきたい。